

石が連なる回廊

-平安宮内裏内郭回廊の調査-

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

1994年6月、平安宮内裏内郭回廊^{だいいりないかくかいろう}を造営時の姿をとどめた状態で発見することができました。調査を行なったのは、千本下立売の交差点を100mほど東に入った地点で木造の民家が多い地域です。平安時代には天皇の住まいである内裏があり、数多くの建物が建ち並んでいました。実際、このあたりは平安時代の遺跡がよく残っている地域で、今までも建物や築地塀・溝などをたびたび発見しています。

また、平安宮の内裏は内部の様子を記録した絵図や文献が伝わっているのです。調査で発見した遺構がどの建物にあたるのかをある程度推定することができます。こうした成果から、調査地は、内裏内郭回廊（内裏を囲む内側の回廊）西回廊の南寄りにあたることがわかります。

調査区の西端には南北方向に黄色っぽい切石が並んでいます。これは回廊の基壇の基底部に据えられた地覆石^{じふくいし}という部材で、凝灰岩^{ぎようかいがん}（火山灰が固まってできたもの）を用いています。地覆石には、内側部分の上端に羽目石^{はめいし}や東石^{つがいし}を組み合わせるための加工がしてあります。よく観察すると石が組み合わせあった痕もうっすらと残っていました。その上にはさらに葛石^{くわいし}が組み合わせられていたはずですが、こ



内裏内郭回廊部分（北から）

造営時の状況を良く残している。中央のあぜは土層観察用。



絵巻物に描かれた内裏内郭回廊（承明門付近）

基壇の中央に築地塼を建ち上げ、両側に屋根を架け、柱で受ける。屋根は檜皮葺で軒先は雨落溝の上までのびていた。築地塼の内側と外側を通行でき、ここを兵衛とよばれる武官が交替で警備にあたった。(田中家蔵『年中行事絵巻』『日本の絵巻8』中央公論社 1987 より転載)

した痕跡から内郭回廊の基壇は、創建時には側面に凝灰岩を積み上げた立派なものであったことがわかります。

地覆石の東側、回廊でいうと内側にあたる部分には雨落溝あまおちみぞが造ってあります。底の部分には平たい石を敷き並べ、地覆石の反対側には細長い石を一列に並べています。これらの石には加工した痕跡はありません。川から拾ってきたものでしょうか。雨落溝の底は北側が南側よりも約10cm高いので、南へ排水していたことがわかります。

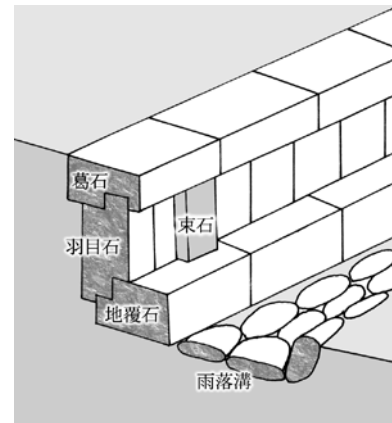
その後、9世紀の後半、回廊には大きな修築が加えられます。基壇は地覆石を残して上半部が解体されてしまい、雨落溝は端の石まで埋められ、地覆石もその盛土に覆われてしまいました。盛土の端

には、新たに一列の石列が加えられます。調査区で見られる最も東端の石列がこれに当たり、このなかには基壇に使われていた凝灰岩や塼せんが転用されていました。さらにその東側には素掘りの雨落溝が造られます。一連の修築により、回廊の幅は広くなったものの高さは低くなり、土がむき出しになってしまうので、全体としてはやや見劣りがしたかもしれません。天皇や貴族たちはどんな印象をもったのでしょうか。

土盛の基壇となった西回廊は、徐々に内側に崩れていったようです。追加された石列も埋まってきました。そんなある日、内裏を大きな火災が襲いました。10世紀中頃のことです。露出していた石列の一部が焼け焦げていることや



基壇部分写真（南東から）



基壇部分模式図

焼けた土の塊が投棄されていることから、回廊本体も炎に包まれ、焼け落ちてしまったと推定できます。基壇の東側には、炭や焼土とともに土器・陶器の破片や焼けた壁土が積み上げられていました。火災の後片付けの整地と考えられます。その後、回廊は再建されたはずですが、調査地内では痕跡が見つかっていません。

今回の調査面積は非常に狭く、約22㎡しかありませんでした。見つかった回廊の長さも約11mで、回廊全長の100分の1程度です。しかし、小さな面積の調査を積み重ねることによって、少しずつですが平安宮の姿がわかってきているのも事実です。これからの調査の進展にご期待ください。

(山本雅和)